

キャンプにおけるボランティアトレーニング効果

末原美佐*, 柳 敏晴**, 千足耕一***

The effect of the volunteer training experience in camping

Misa SUEHARA*, Toshiharu YANAGI**, Kouichi CHIASHI***

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effect of volunteer training experience in camping. The question is about volunteer's self-concept, hard-skills, soft-skills. The subjects are 16 leaders who participated in "volunteer training camp 1・2～ASO waku waku camp".

The result was summarized as follows:

- 1) Through the training, self-concept improved intentionally and the training effect was found out.
- 2) A part of instruction capability of the hard-skills performed by training improved.
- 3) Soft-skills improved intentionally in "group management", "instruction expression", "individual respect", and "experience reflection".

Although it was partial, the volunteer training effect was found out by the study.

KEY WORDS : volunteer training, self-concept, hard-skills, soft-skills

1. 緒言

現代社会においてキャンプは単に教育やレクリエーションのための手段や目的だけでなく、人々が歴史的発展の中で失ってきた不足体験の補完という役割も含めて人間の存在そのものにとってもきわめて重要な役割を担いつつある¹⁴⁾。

Armand¹⁾によると、キャンプの効果は、目標達成のために組織されたスタッフの協力と精神にあるとされている。このことから、スタッフにキャンプのねらいとそれを達成するための方法と運営方針との関連性をはっきり説明するために、スタッフトレーニングを行うことは重要である。また、スタッフ自身も、その体得に熱意と努力をもって取り組み、良いスタッフとしてその責任が果たせ

るように心がけることが大切であるとされている。

Swan¹⁵⁾は、キャンプに代表される野外教育の一般的目的として、1) 社会性の育成、2) 自己概念または自己認識の向上、3) 教科の拡充、4) 環境の認知と理解、の4領域をあげている。van der Smissen¹⁷⁾は、野外体験が参加者に及ぼす効果を、1) 環境に対する行動と理解、2) 社会的相互作用、3) 自己の発達、の3つに大別している。このように、自己概念の向上や自己の発達は、キャンプの目的の一つであり、キャンプ効果の評価研究における主要な従属変数となっている。キャンプにおける自己概念の向上に関する研究は、飯田⁷⁾をはじめとする多くの報告があり、キャンプカウンセラーにおける自己概念の向上に関しても高橋の報告¹⁶⁾などがある。このように、キャン

*鹿屋体育大学大学院

**鹿屋体育大学スポーツライフスタイル・マネジメント系

***鹿屋体育大学海洋スポーツセンター

ブが及ぼす効果に関する研究の多くは、自己理論の枠組の中で展開されており、特に自己概念の向上が中心となっている。また、林ら³⁾によると、青少年教育施設におけるボランティア研修会の参加者は、「ボランティアの多様性と理解」「自己実現への意識」に期待していると報告している。そこで本研究では、ボランティアトレーニング開始前からキャンプ終了後までのボランティアの自己概念に着目することにした。

Priestら¹³⁾は、効果的なアウトドアリーダーの要素として、社会的心理・哲学・歴史といった基盤の上に、ハードスキルがあり、その上にソフトスキルが重なり、それらをメタスキルが結合していると図示している。リーダーのトレーニングにはこれらをうまく組み合わせることが必要と述べているが、最良の組み合わせは未だにわかっていない。

また、わが国においては、平野⁵⁾がキャンプにおけるカウンセラートレーニングの研究を行った以降、キャンプカウンセラーのトレーニングに関する研究は見受けられない。そこで、ボランティアトレーニングの効果を評価するために、ボランティアの自己概念及び、野外活動指導者に求められている資質・能力の向上も重要であると考えた。ボランティアトレーニングにおける自己概念及び資質・能力の変化を測定することによって、今後のボランティアトレーニングの普及発展および指導者養成を考える上で重要な示唆を得られるものと考えられる。

本研究では、キャンプにおけるボランティアトレーニング効果をボランティアの自己概念及びハードスキル・ソフトスキルの向上の観点から明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1. 調査対象

平成17年度独立行政法人国立阿蘇青年の家主催事業として実施された「キャンプボランティア実

践講座Ⅰ・Ⅱ～ASO わくわくキャンプ」(トレーニング:2005年6月24日～26日の2泊3日, キャンプ:2005年8月1日～7日の6泊7日)を調査対象とし、この主催事業に参加した男性12名, 女性11名に調査を実施した。分析にあたっては、ボランティアトレーニング前後・キャンプ前後の計4回の調査において、誤記入や未回答等のなかった16名を対象とした。年齢は16歳から22歳(平均 19.1 ± 2.10 歳)であり、ボランティア経験は初めてから4年目(平均 1.69 ± 0.85 年)であった。

2.2. 主催事業の概要

本主催事業は、子どもたちの生きる力の育成をねらいにした野外活動の企画・運営・評価を行うことで、野外活動ボランティアとしての資質向上を図ることを目的としている。実践講座Ⅰがボランティアトレーニングであり、実践講座ⅡがASO わくわくキャンプとなって、キャンパーも参加しての実践編となる。

事業を運営する組織は企画・運営・評価の全てを、キャンプディレクター(大学院生1名)、プログラムディレクター(大学生2名)、マネジメントディレクター(大学院生1名, 大学生1名)からなる実行委員が行い、他のボランティアは、プログラムスタッフ1名、マネジメントスタッフ9名、カウンセラー5名、サブカウンセラー5名を担当している。

2.2.1. 実践講座Ⅰ(ボランティアトレーニング)の概要

キャンプボランティアとしての知識・技能について学び、子どもたちに対する支援などの実践的な技能を身につけるとともに、プログラム編成や実施運営に主体的に取り組むことで、スタッフボランティアとしての資質向上を図ることを目的としている。

プログラムは表-1に示すとおりであり、ワークショップやキャンプ説明, サイクリングが行われた。

表一．ボランティアトレーニングのプログラム

	午前	午後	夜
1日目		アイスブレイク	キャンプ説明
2日目	サイクリング	サイクリング	CPR
3日目	キャンプ会議		

2.2.2. 実践講座Ⅱ (ASO わくわくキャンプ) の概要

仲間とともに自然の中で、思いっきり感動して、感謝して、その想いをたくさんの人に伝えようという思いを込めた「いっぱい」をテーマに、阿蘇・九重の神話・昔話を取り入れたものである。

プログラムは表一に示すとおり、サイクリング・沢登り・九重登山が行われた。

表二．キャンププログラム

	午前	午後	夜
1日目		開村式	アイスブレイク
2日目	サイクリング	サイクリング	沢登り準備
3日目	沢登り	沢登り	フリープログラム
4日目	フリープログラム	クラフト	登山準備
5日目	九重登山	九重登山	スターウォッチング
6日目	下山	野外炊飯	村祭り
7日目	片付け・反省	閉村式	

2.3. 調査内容

2.3.1. 自己概念

自己概念とは、自らが自己を対象（客体）として把握した概念であり、自分の性格や能力、身体的特徴などに関する、比較的永続した自分の考えである¹²⁾。自己概念を測定するために、梶田¹¹⁾が作成した自己成長性検査を用いた。自己成長性検査は、自己形成及び自己実現に関する態度や意欲を測定するものであり、31項目、4因子（達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者のまなざしの意識）から構成されている。得点化にあたっては、「非常にあてはまる」を5点とし、「全くあてはまらない」を1点とする5段階評価に修正した。得点可能範囲は、31～155点であり、得点が高いほど自己形成、自己実現に関する態度や意欲が高

いと評価できる。

2.3.2. ハードスキル

ハードスキルとは、個々の野外活動技術（カヤックによるパドルの使い方など）や個々の野外活動技術を実施するための周辺技術（安全管理、健康管理など）である⁴⁾。ハードスキルの指導能力を測定するために、山田ら⁶⁾が作成した各活動における指導能力の自己評価を採用した。20の活動の項目からなる評価尺度に、筆者が独自に作成した、安全管理・健康管理・食事配慮のスキルを含む6項目を追加した。得点化にあたっては各活動を指導できるとし、「大いに当てはまる」を5点、「全くあてはまらない」を1点とする5段階評価で行った。

2.3.3 ソフトスキル

ソフトスキルとは、個々の活動をより効果的に、円滑に進めるといった技術（話し方など）である⁴⁾。ソフトスキルを測定するために、土方ら⁴⁾が作成したキャンプカウンセラーのソフトスキル評定尺度を採用した。35項目5因子（集団運営、カウンセリング、指導表現、個人尊重、体験反映）からなり、「非常によくあてはまる」を4点とし、「あまりあてはまらない」を1点とする4段階評価で行った。

2.3.4. 調査手順

ボランティアトレーニング初日及び最終日、ASO わくわくキャンプ初日及び最終日の計4回、上記の自己概念、ハードスキル及びソフトスキルに関する質問紙を、直接配布・回収した。

2.3.5. 統計処理

統計処理には、ノンパラメトリック検定のフリードマン検定を用い、多重比較にはウィルコクソンの符号順位検定結果にボンフェローニの不等式による修正を行った¹⁰⁾。なお、全ての計算は、SPSS for Windows ver.12.0を用いて行った。

3. 結果及び考察

3.1. 自己概念の変化

ボランティアの自己概念の変化をボランティア
トレーニング前後・キャンプ前後で比較するため

に分析を行った結果、有意差が認められた ($p < .01$,
表-3, 図-1)。

また、下位因子について、分散分析を行った結
果、「他者のまなごしの意識」に有意差 ($p < .001$,
表-4, 図-2) が認められた。

表-3. 自己概念得点

N=16

	トレーニング前		トレーニング後		キャンプ前		キャンプ後		p
	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	
自己概念	92.53	8.56	93.33	9.79	101.27	8.16	103.64	12.38	**

** $p < .01$

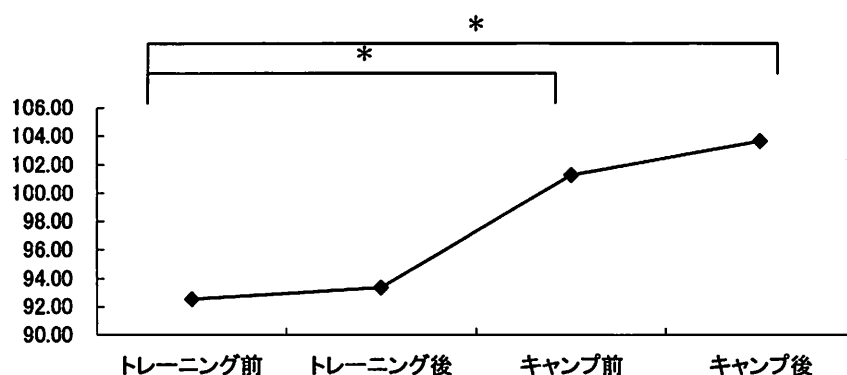


図-1. 自己概念得点の変化 (N=16)

*有意差あり

表-4. 自己概念の下位因子得点

N=16

	トレーニング前		トレーニング後		キャンプ前		キャンプ後		p
	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	
達成動機	28.46	3.37	28.75	3.38	28.73	2.96	28.63	4.03	n.s.
努力主義	31.93	3.31	33.06	3.21	32.63	3.26	34.00	4.13	n.s.
自信と自己受容	16.56	3.97	16.56	3.46	18.25	3.66	18.00	4.05	n.s.
他者のまなごしの意識	15.31	2.15	15.07	2.58	20.75	2.75	21.21	3.89	***

*** $p < .001$

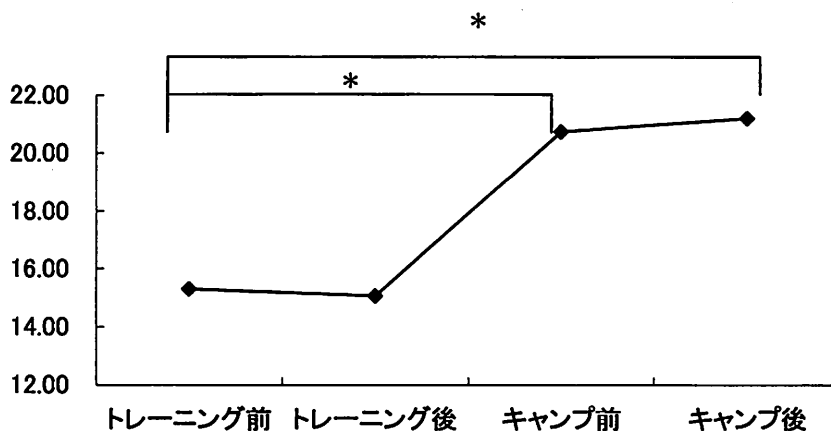


図-2. 他者のまなごしの意識因子得点の変化 (N=16)

*有意差あり

自己概念得点はボランティアトレーニング後からキャンプ前にかけて有意に向上している。ボランティアトレーニング終了後にASOわくわくキャンプに向けてメーリングリストを立ち上げ、キャンプ開始までの間に情報交換を行ったり、数人で集って勉強会を開催したことや、ボランティアトレーニングでアイスブレイクや活動の合間に、課題解決型ゲームを行っていたことが影響していると考えられる。ディックら²⁾によると、課題解決型ゲームを取り入れた冒険プログラムを行うことによって自己概念が明らかに向上し、その基本的要素としては、信頼関係の確立、ゴール設定及びチャレンジ・ストレスがあげられている。トレーニングにおいてボランティア自身が課題解決型ゲームを体験し、キャンプまでの間に情報交換を行うことにより知識を深め、キャンプでは実際に指導する、といった自分の役割理解が出来たことによって自信ややる気を高め、他のボランティアとも信頼関係が高まったため、自己概念が向上したと考えられる。

下位因子の変化を検討すると、「他者のまなざしの意識」で向上が認められた。他者のまなざしの意識とは、他人から受け入れられるかどうか、評価されるかどうか、ということが当人の行動原理として機能している程度を示している⁹⁾。ボランティアトレーニング参加者は、トレーニング・キャンプを経験することによって自信ややる気を高め、内面的基準性が増してきたものの、まだ確立されたものではなく、変化の過程に対しての外的評価、特にキャンパー評価がどうなのか気になったものと考えられる。キャンパーを対象にしていた先行研究の多くは、「達成動機」や「努力主義」が向上し、「自信と自己受容」や「他者のまなざしの意識」は大きな向上はなかったと報告している^{7) 8)}。これらが本研究の結果と一致しなかったのは、被験者の違いによるものであると考えられる。ボランティアとは、キャンパーの成功を補助する立場であり、単純に困難な課題を克服した達成感とは異なる感情をもつと考えられる¹⁰⁾と述

べられている。ボランティアトレーニング参加者のトレーニング後の自由記述からも、「共に向上しようという意志を持つことができた」「やりがいがあると感じた」「しっかり役目を果たそうと決心した」「この経験を活かせるように尽力することが、今後の課題であり目標である」といった意見が多くみられた。つまり、ボランティアトレーニングを経験することによって、自分の役割認識を持ち、それらが果たしているのかといった、任務遂行に関する評価を意識しているのではないかと考えられる。

3.2. ハードスキルの指導能力の変化

ハードスキルの指導能力の変化をボランティアトレーニング前後及びキャンプ前後で比較するために分析を行った結果、キャンプソング ($p<.001$)、ネイチャークラフト、野外炊飯、野外ゲーム、ナイトプログラム ($p<.01$)、サイクリング ($p<.05$) に有意差が認められた (図-3)。

スタッフトレーニングにおいて、サイクリング・応急手当を実施したが、向上効果が認められたのは、サイクリングだけであった。応急手当は、ボランティアトレーニング後には、得点が向上しているものの、キャンプ前に減少している。時間の経過により自信が低下したと考えられるため、応急手当についてはキャンプ直前に復習しておくことが必要であると考えられる。また、ネイチャークラフト、野外炊飯、ナイトプログラムは、キャンプで実施し、キャンプソング、野外ゲームは、活動の合間や導入に多く用いていたため、向上したと考えられる。

3.3. ソフトスキルの変化

ソフトスキルの変化をボランティアトレーニング前後及びキャンプ前後で比較するために分析を行った (表-5)。集団運営スキル ($p<.001$, 図-4)、指導表現スキル ($p<.05$)、個人尊重スキル ($p<.01$)、体験反映スキル ($p<.05$) に有意差が認められた。

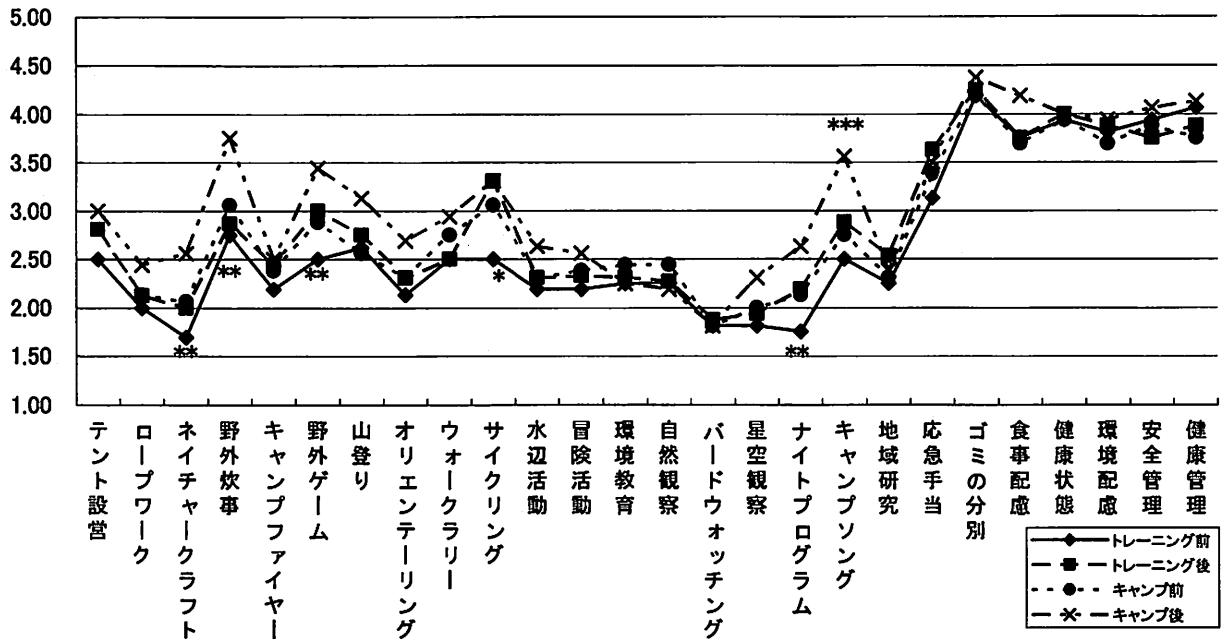


図-3. ハードスキル評価尺度得点 (N=16)

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表-4. 自己概念の下位因子得点

N=16

	トレーニング前		トレーニング後		キャンプ前		キャンプ後		P
	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	
集団運営	1.94	.44	2.26	.48	2.32	.52	2.38	.61	***
カウンセリング	2.35	.60	2.52	.63	2.64	.64	2.72	.73	n.s.
指導表現	1.81	.73	2.06	.73	2.28	.63	2.29	.77	*
個人尊重	2.37	.79	2.84	.79	2.72	.71	3.00	.88	**

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

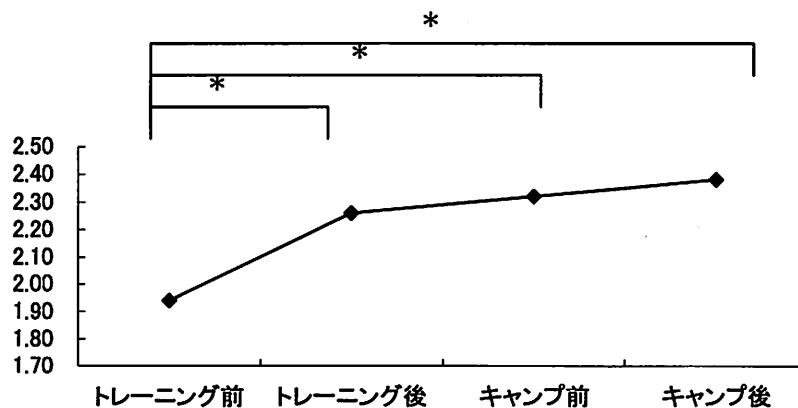


図-4. 集団運営スキル得点の変化 (N=16)

*有意差あり

集団運営スキルとは、グループの目標設定や目標に向けてのキャンパーへの促しなどのスキルである⁴⁾。ボランティアトレーニングでは、テーマ

理解、目標・課題設定についてボランティア全員の共通理解を得ることに重点を置いた。キャンパーに対しても、テーマ・目標設定をグループ・個人

で行い、毎日ふりかえりを行っていた。多重比較においても、ボランティアトレーニング前から、ボランティアトレーニング後・キャンプ前後それぞれにおいて有意に向上していることから、これらが効果的であったと考えられる。

しかし、カウンセリングスキルにおいては向上が認められなかった。土方ら⁴⁾によると、カウンセリングスキルとは、カウンセリングアプローチを利用したキャンパーとの関係を表しており、カウンセリングの基礎となる他者への態度と関連する大切なスキルである。また、ソフトスキルのすべてのスキルの基礎にはカウンセリングマインドが存在し、キャンパーの内面を的確に捉えることの重要性を示すスキルといえる。また、カウンセリングスキルと集団運営スキルとの相関はやや高く示されており、集団運営全般にわたるカウンセリングマインドの必要性が示唆されている。

4. 結論

ボランティアトレーニングはボランティアの自己概念の中でも、他者のまなざしの意識に影響を与えたと考えられる。また、ボランティアトレーニングで行った活動の指導能力については、一部向上が認められ、キャンプで実際に体験することによっても、指導能力が向上することが示唆された。また、ソフトスキルについては、ボランティアトレーニングにおいて、キャンパーを中心に考えて取り組むことが重要であると考えられた。

本研究において、ボランティアに学んで欲しい目標を明確にし、トレーニングプログラムを企画・運営することが、キャンプにおけるトレーニング効果につながることを示唆された。

その一方で、取り組むべき今後の課題もある。本研究では、ボランティアの自己評価による評価を試みた。平野⁵⁾の研究によると、トレーニングを受けたカウンセラーは、自己評価を高めるといふ効果は見られなかったが、自信や問題意識を高める傾向が見出され、キャンパー評価や観察者

評価が高い傾向にあることが報告されている。今後はボランティアの自己評価、キャンパーによる評価、第三者からの評価からもトレーニング効果を検討していく必要があると考えられる。

5. 参考引用文献

- 1) Armand and Beverly (2004) BASIC CAMP MANAGEMENT 6th Edition. American Camping Association. 127-140
- 2) デイック・ブラウティ, ジム・ショーエル, ボール・ラドクリフ (1997) アドベンチャーグループカウンセリングの実践. C.S.L.学習評価研究所. 11-27
- 3) 林幸克, 谷井淳一 (2001) 青少年教育施設におけるボランティア研修会の効果に関する検討. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要. 創刊号: 9-19
- 4) 土方圭, 飯田稔 (2004) キャンプカウンセラーのソフトスキル評定尺度の開発. 野外教育研究. 7-2: 23-34
- 5) 平野吉直 (1982) キャンプにおけるカウンセラートレーニングに関する研究. 筑波大学大学院体育学研究科
- 6) 兵庫県立 南但馬自然学校 (2003) 研究紀要-自然学校指導補助員に関する調査. 兵庫県立 南但馬自然学校
- 7) 飯田稔 (1986) 冒険キャンプにおける小学生の自己概念と不安の変容. 筑波大学体育科学系紀要. 9: 91-101
- 8) 井村仁 (1985) 短期間のアドベンチャー・プログラムが小・中学生の自己概念と不安に及ぼす影響. 国武大紀要. 1: 15-25
- 9) 井村仁, 小島哲, 寄金義紀, 飯田稔, 吉田章, 橋直隆 (1992) フロントニア・アドベンチャー事業に関する評価研究-参加者に関わる評価を中心に. 筑波大学体育科学系紀要. 15: 103-117
- 10) 石村貞夫 (2003) SPSSによる分散分析と多重比較の手順[第2版]. 東京図書株式会社
- 11) 梶田毅一 (1988) 自己意識の心理学[第2版]. 東京大学出版会
- 12) 中島義明, 安藤清志, 子安増生, 坂野雄二, 重樹算男, 立花政夫, 箱田祐司 (2000) 心理学辞典. 有斐閣. 327-328
- 13) Simon Priest, Michael. Gass (1997) Effective Leadership in Adventure Programming. Human Kinetics. 15-18
- 14) 社団法人 日本キャンプ協会 (2000) キャンプ専門科目テキスト. 1-7
- 15) Swan MD (1987) Resident outdoor education (Ed) Swan MD (In) Tips and Tricks in Outdoor Education.

The Interstate Printers & Publishers, Inc., Illinois.
245-254

- 16) 高橋仁大 (1997) キャンプカウンセラー体験が自己効力と自己概念に及ぼす影響. 筑波大学体育研究科研究論文集. 19 : 435-440
- 17) van der Smissen B (1975) The dynamics of research, (Ed.) van der Smissen(In) Research Camping and Environmental Education. The Pennsylvania State University. 5-17